

## ■（256）復興の先の心の支えは？ 聞こえてくる被災者の悩み

岩手県の内陸を東に向かうJR釜石線の車窓から見える空は一面、雪雲です。北陸のような豪雪ではないものの、いつもより雪が深いようです。終点は釜石。山を越えて太平洋沿岸に来ると、少し雲が薄くなりました。1カ月後の震災7年に向けた取材です。

積もった雪が地面を覆い隠すように、被災した跡も土盛りや区画整理などですっきり見えなくなってきました。それだけ復興は進みました。でも、被災者の暮らしや心は簡単には元には戻りません。朝日新聞は震災翌年から毎年、被災者千人を対象にアンケートを続けています。何人かには記者が直接会って、どういう暮らしかなどを聞かせてもらっています。対象の名簿を元に連絡しての訪問ですが、今年もいくつか名前が名簿から消えていきました。亡くなったり、「もういい」と取材を断ったり…。連絡がついた人からよく聞こえるのは、再建を果たしたはずの家や災害公営住宅で「寂しい」という声です。

再建を目指す月日は大変だったが、気持ちに張りがあった、と高齢女性は訴えます。老後をどう過ごしたらいいのか。一気に高齢化の進む国全体の課題となります。(山)